

師匠とドラムとわたし



大畑 楽 歩

(整理収納アドバイザー/Office-楽歩代表)

「こんな国じゃ…」といつてもなにも始まらないのと同じに、「なぜ私が障害者なの?」と嘆いていても幸せにはなれません。

現状を変えようと努力しないことには、身の周りの環境も、世の中も変わることはありません。そう考えれば、

健全者も障害者も平等なんです! 私には障害を、個性と表現することに、抵抗を感じてしまいます。似たようなところでは、「障害」の「害」をひらがな表記に変えたところで、やっぱり本人にとっちゃ立派な「害」になつてゐるわけだし!とひねくれ者の私はそう思つちやうのです。

しかし、障害を個性と表現する方の気持ちは、痛いほどわかります。「個性」という表現には、障害者という枠に押し込めるのではなく、人間として辛いことや大変なこと、あるいは楽しいことや気持ちイイことを共感しようよ!というメッセージがこめられているのでしよう。

障害があると楽しめることが限られるって本当でしょうか?

そりゃ、障害がある以上、行動に制限が加わるのは確かです。私のように走れない脳性まひ者に、ランニングの

心地よさやしんどさをひつくるめた「快感」を味わうことは不可能でしょう。でも、楽しみたいと思う気持ちに、どんな身体的ハンデイもバリアにはなり得ません!

私は、もう中年と呼ばれる年になつても、毎週ドラムのレッスンを嬉々と通っています!師匠が作つて下さった特製ペダルと、握れない左手でも、スティックが持てるためのサポーターと、それから車から教室までの移動のために必要なショッピングカートを積み込み、自分の運転でレッスンに通うのです。

指示通りに動いてくれない身体…。なのに動かしたくなる!!まともに動くことができなくても、やりたいことはやりたいし、極めたいことはトコトン追求したい!!

私と師匠のスタンスは、根性で打ち

負かす!いわゆる「特訓あるのみ」ではなく、マヒした状態でも、いかに工夫を凝らし、気持ちよく完奏できるかという観点からはじまつていて、この考え自体もかなり凄いことだと思いますが、これによって生み出されたユニークな練習法が、これまたスゴイのです。

たとえば、テンポを落としてもボーカーの声はそのままになるアプリを活用しながらの練習や、曲を4小節ごとに区切って師匠と交代で演奏していく「リレー方式」など、オリジナリティーに溢れる演奏が毎回、師匠とのコミュニケーションによって発展していき、満足度100%のレッスンになるのです。

とかく障害者というのは、その身体的能力の制限から、どうしても内容がマンネリ化しやすく、つまらないレッスンに陥りがちなんです。それは、もはや仕方のないことと、子どもの頃からの様々なお稽古事を通じて、受け入

れてきたことだったので、師匠の妻は「レベルを下げて、とりあえず演奏できた!」という感覚では終わらせないところにあります。

障害によって技術的に不満はあつても、精神的にはとても満たされる!という感覚は、障害者には、そうそう容易に手に入れられるものではありません。

さきほどのリレー演奏にしても、休止中に心の中できちんとリズムを刻み続けていないと、スムーズな交代などできないのだから、リレー方式もドラマーになるための大事なレッスンなんだと師匠はおっしゃる。これぞツボなんですよ。

私がどんなに根性を使い果たそうとも、体力的に長時間叩き続けることは不可能なこと。しかし精神面では、みんなと同じように鍛錬することで、少しずつ鍛えていける。ドラマーとしてのドラマー魂みたいなものは、こうし

て満たされ、さらに上を目指せるレッスンへとつながっていくのです。

つい先日、ドラムのセッティングを大幅に入れ替えるという師匠の発想によって、新たな可能性を切り開いた私たち。

ここでは、細かなセッティングの説明については、割愛させていただきますが、目からウロコだったのは「えっ、左足の方が踏みやすかったん?」と師匠が驚かれたことでした。

私は常々、左足で踏むことができたら…と思っていたので、そんなことは師匠も承知の上だと思ひ込んでいたのです。何事も伝えてみないと、何もはじまらない!のですね。

ちようど左右を入れ替えたセッティングになるのですが、こんなに奇抜で素敵な配置を思いつくなんて、師匠おそるべし!配置が替わることで、演奏方法にも工夫が必要に。なぜなら通常、

両手はクロスの状態で演奏するところ、私の配置ですと、手は平行のまま演奏することになり、『フィルイン』と呼ばれるキメのリズムの部分が、譜面通りに演奏できなくなることもあるからです。

叩く手順を工夫してもダメな場合は、師匠の出番！既存のものより、格好いいキメを即興で書き換えて下さり、なんだか高度なテクを伝授してもらったようで、ドラマー気分は最高潮。

ドラム一つ一つのパーツは重いため、オリジナルの配置にセッティングするのに、毎回汗だくになるのですが、無茶をムチャと思っていない私にはフツーのこと。でも、師匠が早めに来て、楽歩仕様に変えて下さっていたり、隣の部屋で自主練習に励む生徒さんが、手伝って下さったりと、まったくお騒がせドラマーもいいところ！

スティックをサポーターで手にくく

りつけ、両手を広げるように演奏する姿や、奇抜なドラムの配置に、あまり詳しくない人から見ても違和感を感じるのは？と懸念する私に、師匠は『全然大丈夫やで！楽歩ちゃんが叩いている姿を見れば、誰もが納得するぐらい自然な配置や！』とおっしゃって下さるので、すかさず『そんな柔軟に受け入れてくれる人って、先生ぐらいちやうかな』と突っ込みながらも、にやける私。

ドラムが好きなのか、それとも師匠に会いたくて、レッスンに向うのか：時折わからなくなりますが。心底ドラムは好きだけど、師匠がある日突然、『今日からはウクレレ』と言われたら、躊躇わずウクレレに持ち替えていそうな私。

人生に潤いを与えてくれる師匠とドラムは、いくつになっても続けたい。『たとえ寝たきりになっても、先生、

天井から吊り下げられるドラムセットを一緒に考えてね！』と、いまからお願いしていて、『楽歩ちゃんらしい発想やな』と苦笑されながらも、『その時はなんとかしよう！』と希望あふれる表情で大きく頷いてくださる師匠ですから、ドラムを一生楽しんでいくつもりです。

まさか、そのとき、私が天井から吊り下がっていないことを祈りつつ！



師匠♪ドラム♪わたし